

木地師研究の現状と課題

The current situation and issues of a study of Kijishi

筒井 正 Tadashi Tsutsui
(現代マネジメント学部)

抄 録

木地師は、滋賀県の鈴鹿山麓で愛知川上流に位置する東近江市（旧永源寺町の蛭谷・君ヶ畑地区）を根元地とし、惟喬親王を職祖と仰いで、人里離れた深山で轆轤を用いて椀・盆など木器容器の製作に従事してきた。彼らは、良木を求めて山から山へと移動し、山村の開拓者、文化の伝播者、そして何より日常生活に不可欠な木の器の生産者、漆器文化の発展に貢献してきた。明治になって木地師が開拓した集落の多くは廃村となり、木地師文化を連綿と受け継いできた人々は他界し、道具や古記録なども散逸し、彼らの事績が忘れ去られようとしている。木地師研究は、民俗学・地理学などの分野において、先学諸賢により数多くの優れた成果が世に送り出されている。しかしながら、歴史学からのアプローチはあまり盛んではない。本論の目的は、今日までの木地師研究を整理し、今後の木地師研究における課題を提示するところにある。

キーワード

木地師 Kijishi 氏子狩 Ujikogari 漆器 Lacquerware ネットワーク Network

目 次

- 1 はじめに
- 2 木地師研究のはじまり
- 3 木地師研究の全国展開
- 4 木地師研究の発展
- 5 まとめにかえて

1 はじめに

国土の7割を森林が占めるわが国は、人々の暮らしに木との関わりが深く、森林資源が日本の文化を育んできたといっても過言ではない。森の恵みを受けるとともに、森を保護してきたのは木地師たちであった。木地師が去った森では、経済性重視の林業政策によって雑木林が皆伐され人工林と化している。各地の人工林で立ち枯れがみられ、森林崩壊が進んでいることは周知の通りである。

木地師の家に生まれた作家の水上勉は「木地師は山を守る民であつが、木地師が減びたように、今日の山から木が失われている。これは銘記しておかねばなるまい」と述べ、わが国の森林の行く末を危惧している（水上勉、1976）。

木地師は、定住農耕民とは異なる高度な知識や情報伝達組織をもち、木の文化の発展に大きく貢献した。明治の御一新で彼らはその稼業を継続できなくなり、木地師制度は崩壊するにいたった。爾来、1世紀半ばが過ぎ去り、彼らの事跡は忘れられつつある。

木地師の研究は、20世紀初頭以来、先学諸賢によって進められてきたが、その全容はいまだ解明されていない。以下に、今までの木地師研究について整理する。今後の木地師研究の参考になれば幸いである。なお、木地挽に従事してきた職人の呼称について、轆轤工・木地屋・木地師など様々な用語が使用されてきた。呼称をめぐって論争まで起きている。文化庁の報告書のタイトルは「木地師」を使用して

おり、また『永源寺町史』においても「木地師」を用いている。本稿でもこの「木地師」という呼称を一般に使用する。研究者の論考を引用する場合には「木地屋」を使用することもある。

17世紀中期以降、蛭谷の筒井正八幡宮（筒井公文所）、君ヶ畑の大皇器地祖神社（高松御所）では、それぞれが、全国の木地師集落を巡廻し、初穂料や神社の管理・維持費を集め、また、木地師の要請に応じて、往来手形や宗門改めなどを配布してきた。この氏子廻りを、氏子駈・氏子狩と称して、その記録の台帳を「氏子駈帳」「氏子狩帳」と呼んでいる。本論では、原則として氏子狩、「氏子狩帳」で統一して記述した。

2 木地師研究のはじまり

2.1 明治の変革と木地師制度の終焉

慶長8（1603）年、徳川家康が江戸に幕府を開いて以来、260年余り、わが国は泰平の世を貪ってきた。元和元（1615）年の大坂の陣以降は、国内での大きな混乱もなく、まさに世界の歴史の奇跡ともいえるべき社会の安寧が保たれた時代であった。

平和な時代にあつて、職人は己の職に誇りをもち、常に技を磨き、使い勝手の良い製品作りに精魂こめて働き、その仕事に生き甲斐を見いだしてきた。為政者には武士道の倫理観、質素・儉約を旨とする生きかたが求められ、庶民は職業的な身分制度のもと、窮屈ではあったが、分相応に暮らしてきた。

ペリーの来航を契機として、わが国の政情は混乱し、クーデターによって幕府は崩壊し、薩長閥による中央集権国家体制が樹立され、国民の一元支配体制が確立した。維新政府は、近代化という名の下に急速なヨーロッパ化を推し進めた。その結果、連綿と受け継がれてきたわが国の伝統、習俗、儒教的価値観が否定され、欧米流の合理主義的、資本主義的価値観が移入され、社会の仕組みが大きく変化した。

富国強兵・殖産興業・文明開化のスローガンのもと、脱亜入欧が新政府の施策の基本となり、矢継ぎ早に社会構造の変革が進められた。とりわけ、徴兵制・地租改正・国民皆学制度・壬申戸籍の編成は、国民の生活に大きな影響を及ぼした。

地租改正により土地所有者に地券が交付され、地券所有者が納税者となった。全国の土地は官地・私地に区分され、幕府や諸大名が保持してきた山林の多くは官地に編入され、宮内省御料局（のち帝室林

野局）の所有となり皇室の財産となった。

この結果、全国の森林で樹木を伐採して木地製品の製作に従事してきた木地師は大打撃を受けた。木地師が従来の慣例によって保持してきた「日本全国入山勝手次第」の御綸旨はその効力を失い、官・民を問わず、その所有者の許可を得ずして樹木の伐採は出来なくなった。各地で「盗伐」という罪で裁判にかけられ、不法な土地利用者として立ち退きを命じられた。大多数の木地師は、廃業、転業を余儀なくされ、木地師文化は終焉を迎えるに至った。人里離れて、ひっそりとではあるが、森林を守り、神への報恩感謝を忘れず、根元地である小椋谷を水上と仰いで、自らのアイデンティティの源泉として生きながらえてきた木地師たちは、さぞ無念であったと思われる。

2.2 御料局官吏田中長嶺と木地師調査の始まり

木地師研究において、その端緒を開いたのは、三河の古橋暉兒（1813～1892）である。古橋家は稲橋村（現豊田市稲武町）で酒屋と質業を営み、篤農家として知られた豪農である。古橋は弱冠19歳で家督を継いだ。実弟が稲橋村で経営する美濃屋木地店では、多くの木地師を職人として雇い椀や盆を製作して販売していた。また、同村の井山地区において近江小椋谷を本貫とする木地師が作る木地椀・盆などを買い取って、漆を塗り、名古屋や関西方面に販売していた⁽¹⁾。

御一新に際して、三河山間部の広大な山林が帝室の御料林に編入され、多くの木地師が職を失い、困窮するにいたった。古橋は御料局長官を歴任した品川弥二郎と知己を得ており、品川を通じて明治25（1892）年、御料局の官吏田中長嶺（新潟県長岡出身、1849～1935）の来郡を請い、窮状打開の方策について相談した。その結果、三河段戸山の御料林に植林をおこなうという条件で、雑木林払い下げを御料局に申請した。田中や品川らの計らいにより、御料局は木地師の入山・伐木を許可し、多くの木地師は急場を凌ぐことができた。古橋はこの事業を通じて、田中と交誼を結んだ。田中は菌類学の草分けとして知られ、シイタケの人工栽培に初めて成功し、また、効率的な炭焼き窯の開発にも取り組み、貧しい農山村の「殖産興業」にその生涯を捧げた人物である。

田中は、翌年4月に再び同地を訪問し、古橋暉兒の後継者である義真の案内で、木地師が住む稲橋村井山に向かい、木地師小椋民治と面会した。同氏の

本籍は滋賀県東小椋村に置かれていた。当時、小椋民治宅に蛭谷の筒井正八幡宮の神主大岩実寿の未亡人ふさが滞在しており、田中は実寿と懇談し、木地師の歴史や伝統に興味関心を抱き、また、老齢の身であった古橋から惟喬親王についてその偉業を調べて欲しいと嘆願され、田中はこの申し出を快諾し、それ以後、精力的に惟喬親王に関する調査・研究や木地師の調査に没頭した。蛭谷へも二度足を運び、木地師文書を筆写し、また聞き取り調査もおこなった。同年11月には、会津に向かい、南会津の木地師集落として知られる保城に至り、総代小椋長次宅に宿泊し、会津の木地師について聞き取り調査を行った。

木地師や惟喬親王に関する研究は、明治33年『小野宮御偉績考』（和綴本、上・中・下3巻）と題して近藤活版所から出版された。調査の経費や書籍の出版費用はすべて古橋暉兒やその後継者義真が負担した。ともあれ、この著書の公刊が、惟喬親王の事績のみならず、木地師文書、木地師による椀・盆などの製作、彼らの習俗、さらに根元地（蛭谷・君ヶ畑）の果たす役割などを広く世に紹介する契機となった⁽²⁾。

2.3 柳田國男と木地師研究

木地師研究を本格的にはじめたのは柳田國男である。柳田は、明治8（1875）年兵庫県神崎郡福崎町で医師の松岡操・タケの六男として生まれた。幼少期から並外れた記憶力を持ち、大変な読書家であった。

長じてのち、東京帝国大学法科大学政治科に進み、農政学を修め、卒業後の明治35（1902）年、法制局参事官を皮切りに高級官僚としての道を歩み出した。視察を目的として日本各地を歴訪するうち、郷土研究に興味関心を抱くようになった。明治41年、自宅で「郷土研究会」を主宰し、その翌年には東北を旅して遠野を訪れ、伝説・口碑の調査研究の急務を痛感した。

宮内書記官の職にあった柳田は仕事の合間をぬって、宮内省の図書寮（現宮内庁書陵部）・内閣文庫（現国立公文書館）などに収蔵されている書籍を読破した。その一冊に田中長嶺の本が含まれていた。

田中長嶺著『小野宮御偉績考』との邂逅が、柳田を木地師研究に向かわせる契機となった。明治44年、柳田は木地師に関する最初の論考を「木地屋物語」と題して『文章世界』に発表した。山中で生活

する人々は漂泊性を持つ。その代表として木地師をとりあげ、木地師の歴史や起源、木地師文書など木地師全般について概説した。ついで大正2年には、美濃武儀郡下牧村大字片知、伊勢の多気郡の山間地方などの木地師集落の事例（「木地屋土着の一二例」）を『郷土研究』に発表した（柳田：1964）。

翌大正3年、柳田は貴族院書記官長という要職に就任し、翌年の大正天皇の即位の大礼の事務方を奉仕し多忙を極めた。大正7年、貴族院書記官長を辞してのち、民俗学研究が彼の仕事となった。民俗学徒として初期の主要なテーマは「木地師の研究」であった。常民としての定住農耕民に対置させて、山人（狩猟民・焼畑農耕・移動する民）への興味関心から木地師の研究に打ち込んだのであった。柳田の木地師研究は、大正14年公刊の「史料としての伝説」として結実した。この論考に通底するテーマは、「伝承を如何に史料として使用するか」である⁽³⁾。「同論考」は、前半において木地師についての様々な問題を論じ、後半では、文献に採録された伝承や記録を収集して整理した。また、最終章において、木地師研究の今後の課題として、①木地師の移住史の全容と苗字をめぐる問題、②木地師と轆轤工具・鉦山との関わりに関すること、③惟喬親王を祖神とするに至った原因、④根元地（君ヶ畑と蛭谷）における対立について、⑤惟喬親王伝承の起こった事情、の5項目をあげている。

柳田の着眼点の鋭さには敬服の至りである。柳田が指摘したこれらの課題は、一世紀近くたった今日でも、十分に解明されているとはいいがたい。柳田は、木地師研究を全国的視野にたって、「比較」という方法で考察を進めた。そして、その帰結点として、木地師は近江をその起源とし、近江から全国に移住していったという近江発生説を提唱した。

『史料としての伝説』は木地師研究の魁として位置づけられ、また、木地師とよばれる職能集団の存在を世に広めたという点において高く評価される。

一般的に、農村や山村にすむ人々を対象にした郷土研究の領域では、資料的な制約があり、歴史研究を深化させることが困難である。その余白を埋めるものが民間伝承である。文献重視の実証史学が幅を利かす時代にあつて、柳田は、民間伝承の価値を重視する立場を鮮明にした。さらに、従来の研究が特定の地域を対象としているのに対し、比較研究の必要性を唱えたことに柳田の学問上の特色がある。

しかしながら、柳田國男の『史料としての伝説』

には、「参考文献」が明示されておらず、また、「引用箇所」が不明瞭で、木地師集落の分析において、文献資料や伝聞を論拠にしたものが多く、現地調査に基づく論考であるとはいいがたい。柳田の研究方法に対する批判は免れない。

2.4 牧野信之助と木地師文書の研究

柳田國男による『史料としての伝説』の公刊に触発された歴史学者の牧野信之助は木地師の根元地（蛭谷・君ヶ畑）を訪問し、木地師文書を採録して、実証史学の立場から史料の分析をおこない、その成果を「所謂木地屋の根元に於ける史料について」と題して、雑誌「歴史と地理」に4回にわけて掲載した⁽⁴⁾。

牧野によれば「柳田國男先生から論考『史料としての伝説』が恵送せられ、卑見を徴せられた。私も滋賀県で編史に関係しており、東小椋村を踏査して史料を一通りみていたので、何か短いものでも纏めてご覧に入れる積もり」で執筆したとその緒言に述べている。

牧野の論文によれば、蛭谷の筒井正八幡宮が所蔵する合計21の文書について、藩政時代以前の日付のある文書は、偽文書であるとみなしている。一方、正保4(1647)年以降の「奉加帳」（「氏子狩帳」）は、史料として信憑性があるとしている。牧野の論文によって、現存する木地師文書に対する史料的評価は論じ尽くされた感がある⁽⁵⁾。

また、君ヶ畑の金龍寺が所蔵する文書に関して、惟喬親王に関する文書が少なく、神道家の白川家に関する文書が多いことを特徴とし、比較的新しい時代の文書が大半を占めるので、その真偽についてはすべて信憑性があるという結論に達している。

牧野は、蛭谷・君ヶ畑の木地師史料の分析を通じて、木地師の起源を文書からたどると、江戸時代の初期を分界線として、それ以前にたどることは不安になると述べている。牧野の研究において重要な指摘は、柳田國男をはじめ他の多くの研究者が木地師発生を蛭谷および君ヶ畑が位置する小椋谷一元説をとったのに対し、その分派が存在したことを認め、蛭谷・君ヶ畑のみがその発祥の地だとは断定できないとしたところにある。

柳田および牧野の両論文が公刊された1920年代後半に、木地師の概要はある程度巷間に流布することとなった。1930年代以降の木地師研究は、柳田・牧野の研究を基礎として展開されることとなる。

2.5 折口信夫と「貴種流離譚」

柳田國男の薫陶を受けた学者の一人に民俗学者・国文学者の折口信夫がいる。折口は、柳田の講義や書籍により木地師に興味関心を抱き、昭和12年に蛭谷を訪れ、木地師と惟喬親王との関わりについて研究を深め、「木地屋のはなし」と題して研究の一端を世に問うている（折口：1937）。

折口は、蛭谷を訪問したおり、「山のはの そらしくれつつ しつかなり きちやのかみに まうてつつくたる」という歌を詠んでいる。折口の木地師に関する関心は、木地師と職の祖神と崇められる惟喬親王との関わりであった。昭和21年8月、関東地区神職講習会に招かれて、「神道宗教家の意義」と題して講演を行った。そのなかで、折口は、箱根で木地師を氏子とする木の宮神社を参詣したときの感想として、「箱根の木の宮は大概、惟喬親王を祀っていると考えられる。それは木地屋、その職の祖神として祀ったのである」と述べている（折口：1976）。

わが国では、非業の最期を遂げた人物が没後に怨霊となって様々な災禍をもたらすと信じられ、その怨霊を神として祀る御霊信仰が古代より継承されてきた。折口は、惟喬親王や在原業平など悲運の皇子や英雄らの伝承や説話を「貴種流離譚」という自らの造語によって類型化した。この「貴種流離譚」は、その後の民俗学・国文学の研究において広く用いられることとなった。

ともあれ、史実と伝承の狭間で揺れ動く「惟喬親王」は、折口によって、「木地師の神」として認識されるにいたった。戦後、折口は神道の研究を深化させ、1949年、「神道の新しい方向」と題する論考において、国家神道や神社神道によってゆがめられた日本の神への信仰を、民族の神々の復活によって取り戻そうとした（折口：1976）。

2.6 民俗調査に基づく木地師研究の本格化

柳田・牧野らの木地師研究に触発されて、1930年代にはいると、フィールドワークに基づく木地師の実態調査が本格化した。福島県会津出身の山口弥一郎は、小学校の教員の傍ら東北地方の山村をフィールドとして精力的に調査をおこなった。山口の研究は、制度化されたアカデミーの地理学に飽きたらず、民俗学的手法を用いて、災害・凶作・開拓・移動といった人々の生活体験に着目し、東北地方の生活改善に資する研究をおこなった。そのなかで、集落との関連で木地師研究をおこない「会津地方におけ

る木地小屋」（山口：1938）、「飯豊山麓に於ける木地小屋」（山口：1939）などの論考を公刊した。

また、民俗学研究者の橘文策は 1932 年以来、都合三回にわたって蛭谷を訪れ、木地師根元地の習俗や年中行事、全国に散在する木地師と蛭谷、筒井神社との関わりについて調査をおこない、その成果を『木地師のふるさと』と題して公刊した（橘：1963）。

3 木地師研究の全国展開

3.1 杉本寿の研究（農業経済学からのアプローチ）

京都大学に進んだ杉本は、農業経済学を専攻し、山村の経済構造と経済更生の方策について研究をおこなった。昭和 2 年、木地師根元地の永源寺町蛭谷で、膨大な木地師文書に接する機会を得て、「氏子駈帳」の調査分析をおこない、その基礎資料をもとにして、全国各地の木地師集落を訪ねて、史料や情報の収集を精力的におこなった。

木地師研究は杉本のライフワークとなった。最初の著作は、昭和 19 年に公刊された『農山村経済の基礎的研究』である。『同書』は日本の山村や農村構造の発達並に衰頹過程の研究を纏めたものである。それ以後も数多くの著書、論考を公刊している⁽⁶⁾。

1965 年「畿内及び周辺の木地師に関する研究」と題する学位申請論文を京都大学農学部に提出した。杉本の学位論文を審査した京都大学教授三橋時雄によれば「本論文は、これまで軽視されてきた木地師の歴史的な役割を重視し、これを総合的・体系的に研究したもので、この種の研究としては最初のもの」であり、「日本の農林業史研究上に寄与した功績は大きい」として農学博士の学位論文として、その価値を高く評価している⁽⁷⁾。

杉本の研究手法論は、前掲の『農山村経済の基礎的研究』の序論において「日本山農村構造の発達並びに崩壊過程の研究手法論に関しては、これを轆轤師制度の研究に基調を為さしむるものである。…わが研究は親王の御尊格を今に伝統せる実証的研究が、一面また日本山農村構造研究の解析の方途ともなるのである」とし、「木地師制度の研究調査は、山村経済更生上重大なる因子を有しているのである」と述べ、全国各地の木地師集落の研究によって日本全国の農山村の全容を把握できると説いている（杉本：1944）。

その後、『木地師制度研究序説』のなかで、農業経済学の立場から「本研究はかかる見地において、

厳密なる方法論的立場における林業経済の本質を主としてわが国山村社会における社会経済の究明に求め、実証学としての日本山村の発展的建設の過程を究明することを目的とする」と述べ、木地師研究の目的を明らかにしている（杉本：1967）。

杉本の木地師研究の方法論について、①木地師と無縁な農山村はあまた存在すること、②史料批判がなされておらず、すべて史実とらえる研究方法には疑問を呈せざるを得ない。

しかしながら、研究生活の大半を根元地のみならず、全国各地を闊歩し、史料を蒐集して復刻し、公刊し続けた。そして、はじめて木地師の研究を制度的に体系づけたという点において、杉本の業績は大なるものがあり、高く評価されてよい。

3.2 橋本鉄男の研究（民俗学からのアプローチ）

橋本鉄男は滋賀県高島郡内の中学校で教師として奉職し、地域の教材化を進めるなかで郷土研究や民俗学の研究に打ち込むようになった。昭和 10 年、柳田國男の還暦を機に「民間伝承の会」が結成された。「同会」は、民俗学の研究と普及および会員相互の連絡を図ることを目的として昭和 24 年に「日本民俗学会」と改称され、民俗学研究が本格化した。橋本も日本民俗学会に入会し、教員の傍ら、民俗学徒として滋賀県内の民俗調査を手がけた。1950 年代のなかごろ、柳田と面談する機会があり、柳田から木地師研究に打ち込むようにと督励された（筆者が本人より直接聞いた）。

昭和 24 年、法隆寺金堂の壁画焼失を機に、伝統文化の保護育成が急務であるという観点から、翌年 5 月、文化財保護法が制定され、同年 8 月、文部省の外局として文化財保護委員会（昭和 43 年文化庁に改組）が設置された。戦後の復興が進み、高度経済成長が進むなかで、有形の文化財のみでなく、無形の民俗資料の保護、調査、記録の作製が急務であるという声が高まっていた。このような趨勢にあつて、昭和 30 年に文化財保護委員会は、急速に失われつつある生活文化のなかで、「木地師の習俗」を記録に残すことが急務であるとして、「木地師の生活伝承」の調査・研究の方針を打ち出した。調査対象となった地域は、岩手、宮城、新潟、石川、岐阜、愛知、三重、滋賀の 8 県であった。

文化財保護委員会は関係地域の教育委員会に調査を依頼した。滋賀県教育委員会は、滋賀県文化財専門委員であった小牧実繁に人選を依頼した。昭和 33

年、小牧は橋本を推薦し、同年4月、橋本は滋賀県教育委員会から「木地師の生活資料と技術伝承」について調査の委嘱を受けた。これが、橋本による木地師研究の契機となり、ライフワークとなった。

この調査の一貫で木地師根元地の君ヶ畑を訪れたおり、「君ヶ畑氏子狩帳」五十一簿冊を発見するに至った。翌年の『日本民俗学会報』(第10号)に、「君ヶ畑氏子狩帳」と題してその概要を報告した。この論考は、民俗学者や郷土史家らが木地師研究に着目する契機となった(橋本鉄男:1959)。

杉本が蛭谷の「氏子駈帳」を中心に分析を試み、そのフィールドを中部日本・西日本に求めたのに対し、橋本は君ヶ畑の「氏子狩帳」を分析し、東日本(主として東北地方)をそのフィールドとして研究をおこない、その業績は多数にのぼっている⁽⁸⁾。

橋本の研究の特徴は、師と仰ぐ木地師研究の先駆者柳田國男の民俗学的手法を発展させたもので、木地師の生産技術や習俗を中心に調査をおこなった点にある。ただ、柳田は全国的な視点から、事例を多く蒐集して整理・分析したのに対し、橋本は地域を限定して集落内部に入りこみ、詳細な調査を行った点が大きく異なっている。橋本の業績として非常に特筆すべきことは、昭和45年に『木地屋の移住史第一分冊君ヶ畑氏子狩帳』を公刊したことである。この著書は君ヶ畑の氏子狩帳の原簿の翻刻版である。橋本の仕事に触発され、杉本も昭和47年、蛭谷の「氏子狩帳」の原簿を翻刻し『木地師支配制度の研究』と題して公刊した。この2人の業績によって、蛭谷・君ヶ畑の両氏子狩帳の全容が明らかになり、木地師研究はこれ以降新たな展開をみることとなった。

橋本の研究は、フィールドワークに基づく調査研究で、手堅さはあるが、一方で、若干の疑念を抱かせるところもある。例えば、惟喬親王は、木地師にとって神であり、信仰の対象となっているのに対し、橋本は、惟喬親王伝承を「共同幻想の小野宮の虚像が実像の如く現成」と論じ、その虚像が「近江の木地屋根元地説となって増幅」していると断じている(橋本:1993)。

学者の論ではある。しかし、木地師根元地の住民や、全国各地の木地師やその子孫は、惟喬親王を職の祖神として崇敬し、その信仰は今日も受け継がれている。研究者がいとも簡単に「虚像」として片づける事には賛同しかねるものである。

また、原木を追いかけて移動を常とする木地師を「漂泊の山民」と特徴づけている。いまやこの表現は、

人口に膾炙した観があり、多くの研究者がこぞって用いている用語である。しかしながら、「漂泊」という用語には、「一定の住居や生業なしにあてもなくさまよいあるく」「さすらう」などといったネガティブな意味が含まれている。木地師は果たして、あてもなく彷徨する「漂泊」の民であったのだろうか。各地の自治体誌に掲載された木地師に関する記述によれば、入山に際して、村方への契約書の提出、地域経済への貢献、藩の統制下にはいって、森林保全と治安維持など地域の人々との関わりが明らかにされている。

木地師は、原木が枯渇すれば他の地域に移動するという特異な職能集団であるが、橋本が声高に主張するような「漂泊」の民ではなく、定着農耕民とは異なった木地師特有のネットワークに基づき、ストラテジーとしての移動民という実態が色濃く浮かび上がってくる。論者は、移動民としての木地師を「漂泊の民」と捉える橋本やその説に同意する多くの研究者の見解にたいし、疑問を呈する者である。

3.3 「氏子狩帳」原簿の翻刻とその公刊をめぐって

1950年代後半から1990年代にかけて、農業経済学の立場から、農山村の経済更生を目的とする杉本と、民俗学の立場から、フィールドワーク重視の橋本が精力的に木地師研究に打ち込んだ。その最も大きな業績は、先述した如く、蛭谷・君ヶ畑の「氏子狩帳」の原簿の翻刻作業であった。

「氏子狩帳」の翻刻とその公刊は、木地師研究に多大な影響を及ぼした。全国各地の山間部に位置する地域の郷土史家や自治体誌の調査者は多大な恩恵を受けた。また、木地師研究の領域に新たな視角を開いたことも事実である。その意味において木地師研究の基礎を確立した2人の功績は大なるものがある。

しかし、「氏子狩帳」の調査・分析において若干の問題点もある。橋本鉄男をはじめ数多くの研究者は、杉本寿著『木地師支配制度の研究』に記載されている蛭谷「氏子駈帳」より算出された数値を、そのまま無批判に利用もしくは引用し、この杉本の提示した数値が定説となりつつある。

杉本によって算出された蛭谷系の木地師の延戸主人員は、総計49,000人であった。その後、地理学の立場から木地師集落の研究をおこなった田畑久夫は、蛭谷の木地師資料館に収蔵されている「氏子狩帳」を閲覧し、杉本の『前掲書』に掲載されている

「氏子狩帳」の翻刻を参照して、その延戸主人員の数値を算出し直した結果、木地師の延戸主人員は、28,045 人となり、杉本の算出数の半分近くになると指摘している（田畑：2002）。

平成 13 年、滋賀県永源寺町が刊行した『永源寺町史』（木地師編下）によれば「記載された木地師の正確な人数を数えることは困難だが、世帯数は概ね蛭谷が 23,000 人、君ヶ畑が 6,000 人である」としている。ともあれ「氏子狩帳」を含めた史料の取り扱いには、慎重な対応が求められる。

杉本・橋本らの研究によって木地師研究の裾野が拡大し、木地師研究をおこなう研究者や郷土史家が増加した。杉本は、昭和 60 年、木地師の調査・研究・交流活動を目的として木地師学会を創設した。同会は、研究者のみならず木地師に縁のある人にも入会を勧め、研究会のほか、学会誌『木地師研究』の発行などをおこなっている。また、かつて木地師集落があり、数多くの木地師がいた地域では、木地師に関する資料館が設立され、木地師に関わる企画展が開催されて、図録や報告書の発刊も相次いでいる。そのなかで、特筆すべき事例として、福島県田島町教育委員会が 2001 年に「会津田島のとびの足跡」と題して木地師の企画展を開催した。その報告書『木地語り』は、単に報告書の域にとどまらない。執筆者金井晃による徹底したフィールドワークに基づく学術論文である（福島県田島町教育委員会：2001）。

4 木地師研究の発展

4.1 自治体誌の編纂と木地師研究

1950 年代後半から始まった高度経済成長は、わが国に活力と豊かさをもたらし、市町村誌の編纂をおこなう自治体も急増した。山間部の自治体では「木地師集落」や、生業として「木地師」をテーマとして採りあげ、その調査分析が進んだ。以下、山林資源に恵まれ、かつて木地師集落の多かった長野県を事例として検討してみる。

長野県では、平野部が少なく、山間部や谷間に小さな村落が数多く成立し、明治初期には 890 ほどの村落があった。新政府が推進した教育制度の徹底などもあり、明治の中期には約半分の 391 へと統廃合が進んだ。以来、半世紀の間、大きな変化はみられなかったが、1950 年代後半以降の高度経済成長や燃料革命などによって、山間部での仕事が減少し、都市部への移住者が相次ぎ、1960 年代には 150 程に減

少した。その後、政府による市町村の統廃合政策などによって自治体の合併が相次ぎ、2010 年には市町村の数は 77 となっている。

さて、長野県における自治体誌は、1924 年信濃教育会諏訪部会が編纂した『諏訪史』を濫觴とし、その後、戦前までに編纂された自治体誌は『飯田町誌』（1932）、『平野村史』（1932）の合計 3 点である。経済上の問題、人員の問題などによって編纂が進まなかったのであろう（自治体誌の数値については、多数の分冊を発刊している自治体にあっても、計算上は 1 点として算出した）。

高度経済成長期（1960～80 年代）にはいると、各地で自治体誌の編纂が相次ぐようになる。1960 年代には 12 点、1970 年代には 23 点、1980 年代には 42 点と増加した。また、1988～1989 年にかけて竹下内閣が「ふるさと創生事業」という名目で、各市町村に資金 1 億円を配布した。この資金をもとにして自治体誌の編纂があいつだ。平成 12 年当時、長野県下の自治体誌の数は 132 点にのぼっている。このうち、27 点において木地師に関する調査研究の成果や木地師に関わる地方文書などが採録されている。山間部の市町村にとって、木地師集落や生業としての木地挽は、地域経済や地域の歴史や文化、庶民の暮らしを記録に残す際に、避けて通ることのできない極めて重要なテーマとなっている。

根元地に残されている木地師関連の文書は断片的で、支配所としての組織やその機能の全容を解明することは困難である。地方に残されている自治体誌に掲載されている木地師関連の文書・資料の有効活用によって、木地師制度の実態解明が促進されと考える。

4.2 地理学からのアプローチ

橋本鉄男や杉本寿によって翻刻された「氏子狩帳」は、全国的規模での非農耕民の移動の実態や木地師集落の形成過程、移住から定住へと向かうプロセスを解明する手がかりとなる貴重な史料である。

1970 年代以降、「氏子狩帳」を活用した木地師の研究が盛んとなった。地理学の分野で、杉本寿の恩顧をうけた渡辺久雄は、かつて木地師が活動していた中国地方の伯耆大山山麓をフィールドとして「氏子狩帳」記載の木地師集落の調査と、当該地域における寺院の過去帳の分析、婚姻や移動の範囲やパターン、木地師の定着など生活全般について研究を行い『木地師の世界』と題して公刊した（渡辺：1977）。

また、田畑久夫は山村の概念を検討して、山地資源の採集や利用を重視する観点から山村を、①「狩猟採集」、②「木地屋集落」、③「焼畑集落」の三つのパターンに類型し、そのなかで、「木地屋集落」に焦点をあてて「氏子狩帳」をもとに、木地師集落の分布や戸数の数量化を行っている（田畑：2002）。

茶樹の研究者松下智は、お茶の伝播と木地師との関わりについて長年研究を行っている。とりわけ、木地師集落が数多く存在した三河山間地において、南信山間地の木地師集落跡に残されている茶樹の調査をもとに、木地師の移動によって、茶樹がもたらされたと結論づけている（松下：1983）。

4.3 歴史学からのアプローチ

歴史学からの木地師研究は、先述した如く、牧野信之助の論考（1928）をその濫觴とする。牧野の論考は、実証史学の立場からの文献批判であり、近世以前の根元地の文書を「偽文書」と結論づけた。一方、技術史の観点では、轆轤技術に関する論考として、瀧川政次郎（1947）、中村たかを（1968）、小林行雄（1976）、橋本鉄男（1979）などがある。また、職人史の観点から、遠藤元男は職人史全般の研究を手がける中で、移動性を持つ木地師について、徒弟制度や技術の継承、仲間組織、職人氣質、職人と信仰などの多岐にわたる研究を行っている（遠藤：1985）。

民衆史の立場から、中世史研究に新しい視座を確立した網野善彦は、鋳物師や轆轤師などの遍歴する職人について、「内閣文庫所蔵轆轤師文書」などを用いて、「木地師も中世後期まで遡って、その特権を保証されていたと論じている。また、網野は、中世において山林は、世俗の権力の及ばない「アジュール」（聖なる場所）であるとして、そのアジュール性の論拠を天皇の権威にもとめ、偽文書とされている「木地師文書」に合理的な解釈をおこなった（網野：1984、1985）。

漆器産業史（漆工芸史）の観点から、磯部喜一は、木地師・塗師など漆器生産の従事者、問屋や行人など流通・販売に関わる者の分析をおこない、木地師と塗師、問屋との階層的関係について言及している（磯部：1946）。

一方、半田市太郎は、漆器産業の構造や流通体制について会津の事例をもとに研究をおこなった（半田：1970）。木地師は木地挽した半製品を漆器商に渡し、漆器商はこれを塗師に渡して漆を塗り、回収

して販売するという生産支配体制が確立していたという。半田は木地師を漆器生産の作業工程の一部分（素地製作）を担う存在として捉えており、かれらの移住や伝承、集団的な側面についての考察はみられない。

紀州黒江の漆器生産について研究をおこなった千森督子によれば、江戸中期以降、紀州藩では黒江の漆器を藩の特産品として保護・統制をおこない、一大漆器産地として発展した。その過程で、木地師と塗師の分業化が進み、町方に居住する「塗師方風呂元」が親方となり、木地師と塗師の両方を配下に組み込み、支配統制をおこなっていた。千森は「氏子狩帳」をもとに分析し、近世の木地師は船尾山麓の古屋敷に集住して、木地挽きを行い、木地師から分れた塗師は入江に面した西の濱・南の濱に集住していたという。黒江では藩の保護により、漆器業が特産品として発展し、生産に関わる職方の居住区が形成され、町の発展と大きく関わっていたことを明らかにした（千森：2004）⁹⁾。

また、特筆すべき新しい分析手法を提示した研究者に北野信彦がいる。北野は民具学の立場から、近世の遺跡から出土する漆器を日常的な生活什器と捉えて分析をおこなった（2005 a）。北野は元興寺文化財研究所に勤務し、出土漆器の保存処理作業を担当するなかで、漆器の理化学的な分析手法を構築し、さらに、出土漆器の調査結果から近世社会の在り方について研究をおこなっている（2005b）。従来の伝承や文字資料に加えて、出土漆器という物的証拠に依拠した科学的な分析手法を用いた北野の論には説得力がある。

今までの木地師研究は、民俗学や人文地理学などにおける事例研究、もしくは、隣接諸科学において断片的に取り上げられているに過ぎない。近年、木地師研究に造詣の深い須藤護は、山野利用と木器について「自然環境・知恵と技術・産業と流通・生活基盤・文化」という5つの条件を設定し、木の文化を体系的に捉える視角を提唱した。傾聴すべき視座である（須藤：2010）。

5 まとめにかえて

研究者はそれぞれ専門性をもち、自らの専門領域との関わりの中で研究を行うのが常である。研究者の増加は、学問領域の細分化をもたらし、それぞれの分野における研究成果の蓄積の層は日増しに厚

くなっている。

様々な学問領域からの木地師研究のアプローチが盛んとなってきた。木地師の研究は、庶民の歴史や伝統、自然との関わりなど、まさに日本の基層文化の研究にとって主要なテーマとなりつつある。

本稿で縷々述べてきたように、木地師研究は、根元地に残されている「氏子狩帳」の原本翻刻とその公刊が契機となり、急速に深化、発展していった。とりわけ、自治体誌の編纂においてその成果は著しい。

木地師研究において課題となるのは、木地師文化発祥地における研究である。筒井公文所、高松御所が果たしてどのような組織で、どのような機能を果たしていたのか、全国の木地師集落との情報網、氏子狩の実態とその経済的な分析、木地師の水上詣と根元地の受け入れ体制、木地師制度終焉のプロセスなど、ほとんど未解明である。

近年、「木地師」を題材とした文学作品が相次いで出版されている。即ち、物語の題材に取り入れられるほどに「木地師」の存在が、多くの人びとに認知されていることの証左といえよう。冒頭で引用したように、作家の水上勉は、自身の祖父が木地師であり、祖父からの教え「日本の自然（森林）は木地師によって守られてきた」を紹介し、木地師と自然との共生、換言すれば、人と森との関わりの大切さを説いている（水上：1976）。

以下に、木地師をテーマとした文学作品を取り上げてみる。白石一郎の短編小説「脱走兵」は、宮崎県椎葉村を舞台として、戊辰戦争に際し西郷軍から脱走して、木地師集落に身を寄せ余生をすごす物語である（白石：1992）。工藤章興は、その著『新真田軍記(1)』のなかで、真田幸村とその配下の忍者について書いている。真田家には約100名の忍者（諜報活動を行う家来）がいたが、関ヶ原の合戦以降、幸村親子が九度山へ配留されたが、家臣で久度山に同行しなかった者は、杣人や木地師などの職業を選んだという（工藤 2000）。白州正子は小椋谷を訪問して能面についての紀行文を書いている（白州：2008）。

時代小説を数多く発表している藤沢周平は、江戸時代、庄内藩で木形子を製作する木地師宗吉を主人公として、木形子に関する豊富な知識と軽妙な筆致で、木地師の世界を見事に描写している（藤沢：2012）。

木地師を扱った文学作品のなかで圧巻は、乙川優三

郎の『脊梁山脈』である。現代小説のなかに、木地師の歴史や職の起源の調査研究を織り交ぜた長編小説で、なかなかの読み応えのある作品である（乙川：2016）。

木地師文化根源地としての小椋谷は、いまや、地元に住む者、縁のある者だけの山村ではなく、木地師の末裔にとって、祖先神を祀る霊的な場所、アイデンティティの源泉であり、心の故郷ともなっている。この心意は、世代を超えて受け継がれている。また、文学作品にも登場するように、木地師の文化は、日本の文化として認知されつつある。

フランスのアナール学派に属する歴史学者アラン・コルバンは『記録を残さなかった男』と題する論考において見過ごされてきた民衆の生活文化に目を向けることの大切さを指摘している（コルバン：1999）。根元地に残る木地師関連の史料はあまりにも少ない。しかし、各地の自治体誌編纂の過程で掘り起こされた木地師史料や、地方文書に現れた木地師関連の史料は豊富である。これらの史料を蒐集・整理・分析することによって、根元地の歴史や木地師制度の全容はかなり解明できると確信する。しかし、個人の研究家が全国レベルの史料の蒐集・整理・分析を行うことは容易ではない。

日本の歴史学において、庶民の生活史に焦点をあてた研究の成果は乏しい。牧野による木地師文書の史料批判以降、木地師の歴史的研究はほとんど進んでいない。木地師の歴史をレガシーとして後世に残すためにも、隣接諸科学の研究成果を援用しつつ、木地師制度やその実態の歴史的解明が急務である。

根元地が所在する東近江市では、2017年に「木地師のふるさと発信事業実行委員会」が組織され、木地師文化の調査・研究、木地師の末裔や現職の木地師との連携強化、全国各地の漆器産地とのネットワーク形成などの事業を進めている。このような取り組みが相俟って2019年5月、日本森林学会から小椋谷一帯の木地師文化が「林業遺産」として認定を受けた。

明治以降、近代化が進むなかで、経済至上主義の営みが、多様性を有する森を林へと変質させ、自然への過度な負荷が自然破壊をもたらしている。その一方で、大量生産による安価なプラスチック製品の流通は、大量消費に伴う使い捨て文化をもたらし、日本人が悠久の歴史のなかで培ってきたモノを大切にする「もったいない文化」を衰退させるに至った。

木地師研究を通して、私たちが失ってしまった自

然を畏怖する心、モノを大切にし、木の温もりがもたらす「おもてなしの文化」の復権を提唱したい。

注

- (1) 古橋暉兒に関して高木俊輔、平成23年『明治維新と豪農』（吉川弘文館）、芳賀 登編、昭和54年『豪農古橋家の研究』（雄山閣）、芳賀 登、昭和46年『明治維新の精神構造』（雄山閣）、古橋茂人、昭和52年『古橋家の歴史』（財団法人古橋会）などに詳しい。美濃屋木地店に関しては、北設楽郡木地屋研究会編、昭和32年『奥三河の木地屋』に詳しい。
- (2) 古橋暉兒と田中長嶺との出会いや、田中による惟喬親王及び木地師研究の経緯に関しては、田中長嶺の紀行文「闡顯紀行」（『小野宮御偉績考』付録）に詳しい。
- (3) 柳田國男の「史料としての伝説」は、大正14年『史学』4巻2号に掲載された。その後、昭和32年『史料としての伝説』と題して村山書店から出版された。
- (4) 牧野の「所謂木地屋の根元に於ける史料について」と題する論考は、昭和3年『歴史と地理』21-1～21-4の合計4回に分けて掲載された。その後、昭和13年「所謂木地屋根源地の史料」（『土地及び聚落史上の諸問題』）と題して河出書房から出版された。
- (5) 木地師文書とは、承久2（1220）年「惟喬親王御縁起」、承平5（935）年「朱雀天皇綸旨」、元龜3（1572）年「正親町天皇綸旨」、天正11（1583）年「織田信長免許状」、天正15（1587）年「豊臣秀吉免許状」などをさし、各地の有力な木地師からの求めに応じて、氏子狩に際して写しを持参した。
- (6) 杉本寿の木地師関連の著作として以下のものがある。
 - ・1944：『農山村経済の基礎的研究』（弘文社）。
 - ・1952：『きじや』（文泉堂）。
 - ・1967：『木地師制度研究序説』（ミネルヴァ書房）。
 - ・1972：『木地師支配制度の研究』（ミネルヴァ書房）。
 - ・1972：『木地師の習俗』[2] 愛知県・岐阜県（平凡社）。
 - ・1974：『木地師制度の研究』第一巻（精文堂）。
 - ・1976：『木地師制度の研究』第二巻（精文堂）。
 - ・1981：『木地師と木形子』（翠楊社）。上記の著書の他、『民俗文化』（滋賀民俗学会）、『伊那』（伊那郷土史学会）、『伊那路』（上伊那郷土研究会）、『美濃民俗』（美濃民俗文化の会）など各地の郷土研究会の会報・雑誌に数多くの論考を寄せている。
- (7) 杉本寿の学位論文の要旨及び審査結果の要旨は京都大学 学術情報リポジトリ
URL: <http://hdl.handle.net/2433/211594>.

- (8) 橋本鉄男の木地師関連の著作として以下のものがある。
 - ・1968『木地師の習俗』[1] 滋賀県・三重県（平凡社）。
 - ・1970『木地屋の移住史』（民俗文化研究会）。
 - ・1971『木地屋問答』（民俗文化研究会）。
 - ・1979『ろくろ』（法政大学出版局）。
 - ・1985『木地屋の民俗』（岩崎美術社）。
 - ・1993『漂白の山民』（白水社）。橋本は上記著書の他に、『日本民俗学会報』（日本民俗学会）、『民俗文化』（滋賀民俗学会）、平成2年に自らが立ち上げた「木地屋とろくろ研究所」が発行する年報『木地屋とろくろ』等の雑誌、その他の論文集などに多数論考を寄せている。
- (9) 黒江の漆器生産に関する研究は、千森の他に、冷水清一 1975『海南漆器史』（自費出版）、加藤明 2010「山中・海南漆器産地の近代化に関する研究」（『北陸地域研究 2(1)』）北陸先端科学技術大学院大学などがある。

参考文献

- 網野善彦 「中世の旅人たち」『日本民俗文化体系 6』 1984 小学館、『無縁・公界・楽』平凡社 1985
- 磯部喜一 『日本漆器工業論』有斐閣 1946
- 遠藤元男 『日本職人史の研究Ⅰ～Ⅴ』雄山閣出版 1985
- 乙川優三郎 『脊梁山脈』新潮文庫 2016
- 折口信夫 「木地屋のはなし」『日本民俗』3-3 1937
「神道宗教家の意義」『折口信夫全集』第20巻
中央公論社 1976 p. 442～460、
「神道の新しい方向」『同上』p. 461～472
- 加藤 明 「山中・海南漆器産地の近代化に関する研究」
『北陸地域研究 2(1)』北陸先端科学技術大学院大学 2010
- 北野信彦 『近世出土漆器の研究』吉川弘文館 2005a
『近世漆器の産業技術と構造』雄山閣 2005b
- 工藤章興 『新真田軍記(1)』(歴史群像新書、学研) 2000
- 小林行雄 『古代の技術』塙書房 1976
- コルバン 『記録を残さなかった男』藤原書店 1999
- 白石一郎 「脱走兵」『海峡の使者』文春文庫 1992
- 白州正子 『かくれ里』講談社文芸文庫 2008
- 杉本 寿 『農山村経済の基礎的研究』弘文社 1944
『木地師制度研究序説』ミネルヴァ書房 1967
- 須藤 護 『木の文化の形成』未来社 2010
- 瀧川政次郎 「日本上代における轆轤の起源と其の使用」
『日本社会経済史論考』日光書院 1947
- 橘 文策 『木地師のふるさと』未来社 1963
- 田畑久夫 『木地屋集落』古今書院 2002 p. 81～84
- 中村たかを 「木地屋—その技術とくらし」『民族学研究』32-4
日本民族学会 1968 p. 293～302

- 橋本鉄男 「君ヶ畑氏子狩帳」『日本民俗学会報』第 10 号
日本民俗学会. 1959 p. 25～35
『ろくろ』法政大学出版局 1979
『漂泊の山民』白水社 1993
半田市太郎 1970『近世漆器工業の研究』吉川公文館.
福島県田島町教育委員会編 2001『木地語り』
田島町教育委員会発行.
藤沢周平 「木地師宗吉」『藤沢周平全集第二十六巻』
文芸春秋 2012
牧野信之助 「所謂木地屋の根元に於ける史料について」
『土地及び聚落史上の諸問題』河出書房 1928
松下 智 「茶の伝播と木地師考」『愛知大学総合郷土研究
所紀要』第 28 号 愛知大学総合郷土研究所 1983
水上 勉 『続日本紀行』平凡社 1976 p. 200～212
山口弥一郎 「東北地方の木地屋の分布」『山口弥一郎選集』
第八巻 世界文庫 1976
柳田國男 『定本柳田國男集』第 27 巻 筑摩書房 1964
冷水清一 『海南漆器史』自費出版 1975
渡辺久雄 『木地師の世界』創元社 1977

（原稿受理年月日 2019 年 10 月 9 日）